# 平家物語

## 作者

「平家物語」は、その成立の事情からして特定の作者の作品とは考えにくいのであるが、最初の一まとまりの物語、いわゆる「原平家」の作者は誰かという点で最も注目される伝承は「徒然草」第二百二十六段である。それによれば、「後鳥羽院の御時」、「信濃前司行長」が入道し、天台座主慈円の庇護のもとに、「平家物語を作りて、生仏と言ひける盲目に教へて語らせ」たという。そして、「生仏」は「東国の者」であったから、「武士のこと、弓馬のわざ」を東国武士たちに聞いて、行長に書かせたとある。

この伝承を直接裏付ける資料はないが、「平家物語」を作り語った人、あるいは人々の人物像について、具体性のある記述である。さらに、この「行長入道」については、慈円の兄、九条兼実の日記「玉葉」に見える、下野守藤原行長であろうとする説がある。その人であれば、中山家の人で、九条家の家司を務めた縁で、慈円とのつながりもあり得る。また、この行長の従弟の藤原時長は、「尊卑分脈」に、「平家物語作者の随一」とあるなど、中山家の人々が「平家物語」の成立にかかわりがあったと考える人は多い。

作者については、その他に、吉田資経・源光行・菅原為長ら、中世以降の資料に名の出てくる人物は多くあるが、いずれも確定できるものはない。「原平家」の成立、資料や話題の提供協力、増補加筆などのさまざまの段階で、多くの人々がかかわっており、これら資料に名の出てくる人物が、その何かに携わっている可能性はある。

## 出典

**▼底本**

新日本古典文学大系「平家物語」（梶原正昭・山下宏明校注、平成三〔一九九一〕、五〔一九九三〕年、岩波書店刊）によった。同書は東京大学国語研究室所蔵の旧高野本を底本としている。これは語り物系の一方流の諸本の中で覚一別本と呼ばれるもので、他に岩波文庫本、日本古典文学全集の底本に用いられている。今日よく読まれているのはこれと同系の一方流のテキストで、覚一本（日本古典文学大系）、葉子十行本（日本古典全書、角川版全注釈）などが底本となっている。これらは十二巻に建礼門院のその後を語る灌頂巻が加わる体裁を持つことを特徴としている。なお、参考「祇園精舎」の「朱昇」（九四・5）は原文に「周伊」とあるのを改めたものである。

**▼書名**

藤原定家が書写した「兵範記」（平信範の日記）の紙背文書に

仁治元（一二四〇）年の書状があって、「治承物語六巻、此間書写候」とあり、「六巻」の下に「号平家」と注記があるところから、「治承物語」という呼称があった、または治承のことを記した物語が存在したと考えられている。また、「号平家」の注記は早くから「平家物語」と呼ばれたことを示しており、一二四〇、五〇年代以降、「平家物語」の名が一般に行われたようである。なお、読み物として展開した系統の増補系には、「源平闘諍録」「源平盛衰記」などの本がある。

**▼成立**

特定しにくい。「徒然草」第二百二十六段の「後鳥羽院の御時」に従えば、承久三（一二二一）年までに、何らかの形で「平家物語」と言える作品が成立したことになるが、作品の内部徴証から鎌倉幕府に藤原将軍が登場する承久元（一二一九）年以前とする説もあり、この頃にいわゆる「原平家」の成立を想定する説が多い。その成立当初の形態について山田孝雄氏は、多様な諸本の全てが巻一・六・九の三巻の書き出しを同じくしていることなどから三巻本であったかとの仮説を立てている。

この「原平家」の内容について、九条道家の日記「玉蘂」の承久二年の記事に、平頼盛の子、光盛が「平家記」「平家」を多く所持したとあるのは、平家一門の記録のことであろうが、三巻の「平家物語」が承久初年頃に成立していたとすれば、そのような資料的な記録をまとめた、素朴な物語であったろうと考えられている。その後、前記「兵範記」紙背文書の「治承物語六巻」の段階が三四〇年頃にあったとすれば、語り物系の完成態である十二巻本に至る発展段階が考えられるわけだが、他に、読み本として多くの題材を吸収して大部の物語に成長していった流れもあり、諸系統の展開と相互関係とは単純でない。語り本の系統についてだけ記しておくと、鎌倉中期頃には琵琶法師の当道座が確立し、一方流と八坂流とに分かれ、十三世紀の末頃には完結した「平家物語」を語っていたと考えられている。やがて、南北朝時代に一方流に覚一が出て、「平家物語」の語りを大成し、応安四（一三七一）年には、その定本と言うべき覚一本を完成した。

**▼内容**

語り本系の諸本は十二巻から成るが、一方流では、建礼門院の後日を物語る話を独立させて、灌頂巻として付加する形態を作り上げた。十二巻の構成について、平家の興隆から清盛の死を物語る巻六までを前半、源平の抗争と平家の衰亡を物語る巻七以下を後半とする二部説、清盛（巻一〜五）、源義仲（巻六〜八）、源義経（巻九以下）を中心人物と見て、主役の交替をもって全体を三部に分ける説などが行われるが、源平の対立抗争によって展開した変動期の歴史を、平家の側に立って、その興隆と衰滅という下降の姿として捉える史観が構想の骨格となっていると見るのが、構想についての基本的な理解であろう。

内容となる歴史の範囲は、天承二（一一三二）年の平忠盛の院の昇殿から、建久九（一一九八）年に、維盛の子、六代が処刑され、平家の嫡流が絶えるまで、約六十五年に及ぶが、平家興隆期に当たる保元・平治の乱などは略して、清盛政権の最盛期の、太政大臣に任じた仁安二（一一六七）年頃から、反平家の動きが高まり源氏の挙兵に至る治承（一一七七〜八一）・寿永（一一八二〜八四）の動乱を経て、壇の浦の合戦（元暦二（一一八五）年）とその戦後処理までの約二十年

間の物語が主たる内容となっている。

**▼語り物**

「平家物語」は軍記物語中の白眉であると評価されるが、それは何よりも、王朝貴族の支配が終わって武家政権が誕生するという大変動が、平家の興隆と滅亡の形で劇的に展開した時代を物語ることによっている。語り物という手法は、その時代を共有した人々が直接間接に作品を成長させていくものであって、激動の時代を生き、そして死んでいった人々への共感が、その激動を形象化して叙事詩の主調音を生み出している。

語り本系の諸本の流麗な和漢混交文の完成に当たっても、語りと享受とが同時に行われる場の意義が大きい。一座制は中世の文芸・芸能の基盤であるが、「平家物語」は源平抗争の国民的伝承を共有する一座という恵まれた場で語りを洗練していった。

## 参考文献

＊ほかに、角川文庫版（佐藤謙三校注）、講談社文庫版（高橋貞一校注）、岩波文庫版（梶原正昭・山下宏明校注）、講談社学術文庫版（杉本圭三郎全訳注）などがある。

**▽主要部訳注・鑑賞**

**鑑賞日本古典文学「平家物語」**冨倉徳次郎　角川書店　昭五十
**鑑賞日本の古典「平家物語」**梶原正昭　尚学図書　昭五十七
**「平家物語の鑑賞と批評」**長野嘗一　明治書院　昭五十
**「平家物語の世界」**水原一　日本放送出版協会　昭五十一

**▽研究・評論**

**「平家物語の研究」**佐々木八郎　早大出版部　昭二十三・二十四
**「平家物語」**石母田正　岩波書店　昭三十二
**「中世文学の成立」**永積安明　岩波書店　昭三十八
**「平家物語の虚構と真実」**上横手雅敬　講談社　昭四十八
**「平家物語の生成」**山下宏明　塙新書再刊　昭六十
**「語り物序説ー『平家』語りの発生と表現」**兵藤裕己　明治書院　昭五十九
**「軍記物語の世界」**杉本圭三郎　有精堂　昭六十
名著刊行会　昭六十

**▽図録・紀行**

**古典アルバム「平家物語」**市古貞次他　明治書院　昭四十六
**写真紀行「平家絵巻」**奈良本辰也　新人物往来社　昭四十七
**歴史と文学の旅「謡曲・平家物語紀行」**白洲正子　平凡社　昭四十八
**図説日本の古典「平家物語」**永積安明他　集英社　昭五十四

**▽教師用**

**新編日本古典文学全集「平家物語」**市古貞次他　小学館　平六
**新日本古典文学大系「平家物語」**梶原正昭他　岩波書店　平三
**新潮日本古典集成「平家物語」**水原一　新潮社　昭五十四〜五十六
**日本古典文学大系「平家物語」**高木市之助他　岩波書店　昭三十四・三十五
**「平家物語全注釈」**冨倉徳次郎　角川書店　昭四十一〜四十三
**「平家物語評講」**佐々木八郎　明治書院　昭三十八

**▽注釈書**

新潮古典文学アルバム「平家物語」牧野和夫他　新潮社　平二
▽研究案内・資料
研究資料日本古典文学「歴史・軍記・歴史物語」大曾根章介他
明治書院　昭五十八
日本文学研究資料新集「平家物語」兵藤裕己
有精堂　昭六十二
「平家物語」（国語国文学研究史大成）高木市之助他
三省堂　昭三十五
「平家物語必携」市古貞次
学燈社　昭四十二
「シンポジウム日本文学・平家物語」山下宏明
学生社　昭五十一
「平家物語研究事典」市古貞次
明治書院　昭五十三
❊生徒用
「平家物語を読む」（岩波ジュニア新書）永積安明
岩波書店　昭五十五
「絵巻平家物語」木下順二文・瀬川康男絵
ほるぷ出版　昭五十九
「平家物語」（新明解古典シリーズ）桑原博史　三省堂　平二
「平家物語」（角川ソフィア文庫　ビギナーズ・クラシックス）
KADOKAWA　平十三
「文法全解　平家物語」（古典解釈シリーズ）杉田黎明
旺文社　平十七
「1日で読める平家物語」吉野敬介
東京書籍　平二十三

## 図版解説

**〈絵本『平家物語』〉**

明星大学図書館蔵。江戸時代前期。奈良絵本。十一帖（全十二帖のうち巻十二の一帖を欠く）。絵本着色。他に伝わる『平家物語』の奈良絵本・絵巻は、いずれも十二巻の本文を元に、三十六軸や三十帖などに巻を分割しているが、明星大学本は一巻を一帖で絵本としている。⇩P88

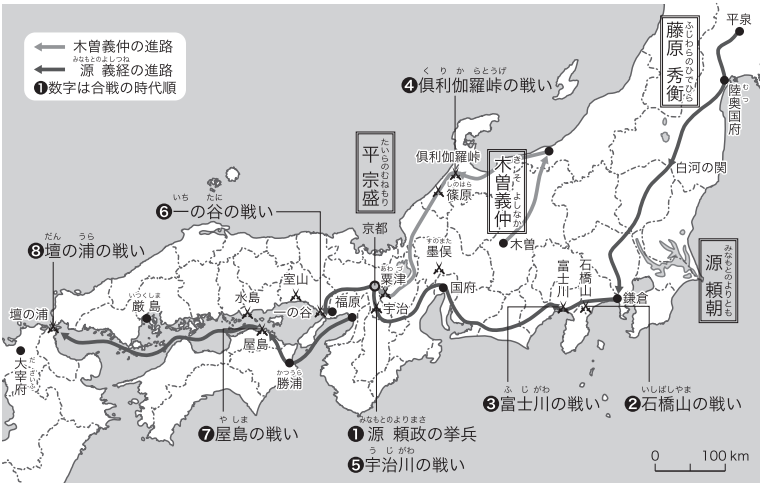
**〈平家物語絵巻〉**

林原美術館蔵。江戸時代。絵巻。三六巻。紙本著色。土佐左助筆。平家一門の栄枯盛衰を題材とした平家物語を絵画化した絵巻。絵の場面数は七〇五、全巻広げると本紙だけで約九四〇メートルにもなる。筆者については詳細不明。⇩P91・92

**〈太平記絵巻〉**

埼玉県立歴史と民俗の博物館蔵。江戸時代。絵巻。一二巻。紙本着色・巻子装。推定海北友雪筆。鎌倉時代末期から南北朝の動乱の様子を記した軍記物語『太平記』を絵画化した合戦絵巻。⇩P94

## 源平の合戦




**『平家物語』関係地図**　主な武将の進路をあげた。

**①源頼政の挙兵**

治承四（一一八〇）年五月

以仁王（後白河法皇の皇子）による平家追討の令旨が下り、それに呼応して、源頼政らが挙兵。平知盛・維盛軍に敗れ、逃げる途中で、頼政は敗死。

**②石橋山の戦い**

治承四（一一八〇）年八月

遅れて以仁王の令旨により挙兵した源頼朝の平家との初めての戦い。頼朝軍は平家方の大庭景親らに敗れ、海路安房（現在の千葉県南部）に逃れ、態勢の立て直しを図り、鎌倉に拠点を構える。

**③富士川の戦い**

治承四（一一八〇）十月

富士川をはさんで、維盛軍と頼朝軍が対峙する。戦いの前から源氏強しの噂を聞き、怖気づいていた平家軍は水鳥の羽音を源氏の来襲と勘違いして逃げ出す。

**④倶利伽羅峠の戦い**

寿永二（一一八三）年五月

以仁王に呼応し、木曽で挙兵した木曽義仲は地の利を生かし、頼朝に先んじて京都に上ろうとした。途中、倶利伽羅峠で維盛軍と戦い、知略を生かし、圧勝。

**⑤宇治川の戦い「木曽の最期」**

元暦元（一一八四）年正月

入京した義仲の評判は悪く、頼朝は義仲追討のため、源範頼・義経軍を派遣。宇治川で義経軍と義仲軍が対決し、敗れた義仲は乳母子今井兼平が戦う粟津（現在の滋賀県）に逃れ、敗死。

**⑥一の谷の戦い**

元暦元（一一八四）年二月

西国で態勢を立て直し、福原まで戻ってきた平家軍を義経軍が背後から鵯越の坂落で奇襲する。平家軍は大混乱に陥り、船で四国に敗走。

**⑦屋島の戦い**

文治元（一一八五）年二月

屋島に陣を構えた平家軍を義経軍が荒天をついて阿波（現在の徳島県）に渡り、山越えをして背後より急襲。慌てた平家軍はまたもや敗走。

**⑧壇の浦の戦い**

文治元（一一八五）年三月

源平最後の戦い。平家の大船に対し、源氏は小船で戦いを挑む。潮流の逆転、水軍の裏切り等で平家は敗れ、滅亡。安徳天皇は祖母の二位殿に抱かれ、入水。